

ひとの花

現代宗教研習所長 三原正資

東日本大震災から一〇年。

平成二十三年（二〇一一）三月一日一四時四六分、定期宗会最終日のそのとき、わたしは三階の院議室にいた。突然、強い横揺れに襲われ、思わず椅子を離れて蹲った。揺れは何回も襲った。五階の講堂へ上がると、東京湾方面の空は黒煙に染まっていた。

拙著『宮沢賢治の宇宙―三・一一を超えて―』（日蓮宗新聞社 二〇一二）に、被災地をたずねたときの様子を次のように記した。

私をはじめて眼にした被災地は静かだった。七月に災害対策本部に所属している所員とともに福島県・宮城県を回った時のことだった。

瓦礫が片付けられ、二軒の家屋が残る被爆直後の広島のような街や、押し寄せる海水によって一階が抜き取られ、傾いた家々が肩をよせあう海沿いの道路を案内された。泥水の残る水田にはまだ数多くの車が放置され荒涼とした風景だった。

（わたくしがいまごろこんなものを感じることがいつたいほんたうのことだらうか
わたくしというものがこんなものをみるのがいつたいありうることだらうか）

(宮沢賢治「青森挽歌」)

という詩の一節を思い浮かべて、大災害に襲われた人の心のうちを想像した。

福島第一原発から三〇km離れた山間部は、異様な静寂に包まれていた。車の姿はなく、作付けされていない水田に囲まれた集落に人の気配はなかった。

その少し前の五月に第四四回中央教化研究会議の準備のために、岩手県花巻市にある宮沢賢治記念館や林風舎を訪れた。温泉にある旅館には大勢の避難民が滞在していた頃のことである。

私たちは花巻駅からほど近い林風舎へいった。ここは賢治の実弟・宮沢清六の孫の宮沢和樹氏が経営する賢治の世界を味わう空間である。コーヒーをいただきながら、もとめたばかりの復刻版「雨ニモマケズ手帳」を開いていると、東京往復のためにしばしば賢治が乗った東北本線の列車が走る音が聞こえてくる。しばらくして、お店の中にいる方が宮沢和樹氏だと気付き、ご挨拶をした。

宮沢和樹氏は奥の方から『国譯妙法蓮華經』を手に持ち、私たちの座るテーブルの上にそっと置かれた。七十年余りにわたって読まれた朱色の表紙は痛んでいた。(前掲書)

このとき、この本には書かなかったことだが記憶に残ったことがある。

和樹氏は『国譯妙法蓮華經』を手にとり、清六さんによると、賢治さんはこの経のこの辺りを大事に考えていたようです、と話しながら、その部分を指した。それは提婆達多品の次の一節だった。

三千大千世界を觀るに、乃至芥子の如き許りも、是れ菩薩にして身命を捨てたまふ處に非ることあることなし、衆生の為の故なり。

たしかに「菩薩が身命を捨てる」というテーマを宮沢賢治は好んで取りあげた。詩「雨ニモマケズ」や『銀河鉄道の夜』……と多い。この賢治が好んだという提婆品の一節は、宗祖最初の著述といわれる『戒体即身成仏義』には、「法華經の悟」（定遺一四頁）の經証として示されている。

法華經の悟と申は、此国土と我等が身と釈迦如来の御舍利と一つと知るなり。

と述べられ、そしてこの提婆品の一節が置かれる。宗祖のこのお考えは、『立正安国論』の六十四字段、『観心本尊抄』の四十五字段へと連なっていくものであろうか。

これは、『四条金吾殿御消息』に

今度法華經の行者として流罪死罪に及ぶ。流罪は伊東、死罪はたつのくち。相州のたつのくちこそ日蓮が命（いのち）を捨たる處なれ。仏土におとる（劣）べしや。（略）龍口に、日蓮が命をとどめをく事は、法華經の御故なれば、寂光土ともいふべきか。神力品に云く、若於林中 若於園中 若山谷曠野 是中乃至而般涅槃とは是れか。（定遺五〇四頁）

と示される厳しい仏土觀である。この覚悟、行動を代償として、穢土は浄土へと転じる。

令和元年（二〇一九）一二月、アフガニスタン東部ジャララバードで、NGO「ペシャワール会」（福岡市）の現地代表で医師の中村哲さん（一九四六―二〇一九）が殺害されて一年を迎えた。中村さんとのインタビューをまとめた作家・澤地久枝さんは、中村さんの人柄と行動について、次のように述べている。

医師として現地へ入りながら、難民化した農民たちが生きてゆくべく、1400本の井戸を率先して掘った人である。井戸では答えがなくて、砂漠化した農地に水路を造った人である。単身ペシャワールへ入り、38歳で妻と子どもを呼び寄せた。水道も電気もない生活である。（略）

2001年6月、次男剛君が発病。9・11で世界中が混乱するとき、アフガンは最悪の早魘さきんに見舞われる。息子は手遅れの脳の腫瘍だった。（略）医師は、呆然ほうぜんとして空白の時間を過ごす。子どもは父親の夢枕ゆめまくらに立ったという。医師は情けの深い人であった。（略）

03年、砂漠化した元農地に水路を掘り始め、09年に約25キロが完通した。15億円の費用は日本人のカンパである。ペシャワール会のワーカー、伊藤和也氏いとうわやは当時（31）は08年に襲われて命を落とし、その後、現地に残ったのは先生ただ一人である。

（『中國新聞』二〇二〇年二月六日）

人々は、中村さんのような生き方をする人がいるから、この世界に希望をつなぎ、生きる意味を見出す。逆に、「世界各地で人身売買と戦っている男女に捧げる」という献辞のある小説『暗殺者の悔恨』（マーク・グリーニー）ハヤカワ文庫（二〇二〇）は、未成年を含む女性を人身売買し巨万の富を得る組織と構成員の実態を描く。この組織には政・財界、警察組織まで絡む。まさに穢土である。

『開目抄』の結語に、宗祖は述べられた。

夫釈尊は娑婆に入り、羅什は秦に入り、伝教は尸那に入り、提婆・師子は身をすつ。薬王は臂をやく。上宮は手の皮をはぐ。釈迦菩薩は肉をうる。樂法は骨を筆とす。天台の云く、適時而已等云云。仏法は時によるべし。(定遺六〇九頁)

「仏教は何もしてくれない」とも言われる。コロナ禍をはじめ災害の多発する今、私たちに出来ることは少なくともい。

作家・葉室麟氏は『嵯峨野花譜』（文春文庫 二〇一七）の中で、人の生き方を「蓮」に見立てて語っている。

この世は苦に満ちた、苦の世じゃ。されど、同時にひとが清く生きる浄土でもあろう。(略) ひとは無惨に散らされるばかりかもしれぬ。しかし、それにたじろがず、迷わず生き抜くことにひとの花があるのです。

蓮華にご自身の生き方を重ねた日蓮聖人降誕八〇〇年を迎える。